

## 表像性の観点から見たチェコ語と日本語との比較

—チェコ語における「形容詞+名詞」の構造をめぐって—

金 杉 ペトラ\*

本稿は、チェコ語の「形容詞+名詞」という構造（以下ADJ+N名詞句）とそれに対応する日本語の言語手段をめぐるチェコ語と日本語の対照であり、対象の言語現象を詳細に観察した上、両言語における類像性（iconicity）の特徴を特定することを目標とする。内容は、基本的に四つの部分に分けられる：①伝統的なチェコ語の規範文法におけるADJ+N名詞句の記述と位置づけの紹介、②コーパスに基づいたチェコ語ADJ+N名詞句とそれに対応する日本語の言語手段の比較、③②の比較の結果と複合語の理論を基にチェコ語のADJ+N名詞句を用例基盤理論という慣習的な言語単位としての再定義、④チェコ語と日本語における類像性の程度の差異の指摘、その日本語教育の際の扱い方の案。

### チェコ語の規範文法におけるADJ+N名詞句

屈折語であるチェコ語では、他の品詞（名詞・動詞・副詞）から形容詞を作るのは非常に簡単で、その生産性も高い<sup>1</sup>。その結果、ADJ+N名詞句が数多く、幅広く使われる。チェコ語の構造主義の規範文法<sup>2</sup>では、基本的に三つの使用が区別されている。統合論上のカテゴリーである、いわゆる「厳密連体修飾語の名詞句」と「自由連体修飾語の名詞句」に語彙論上のカテゴリーである「多語名詞」である（図1参照）。

「厳密連体修飾」とは名詞の直前で使われ、も

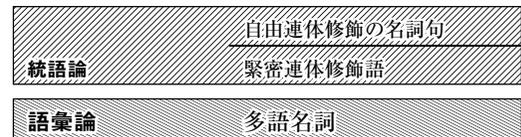


図1) チェコ語の規範文法のADJ+N名詞句の分類の種類の表す修飾語である<sup>3</sup>のに対して、「自由連体修飾」とは名詞から遠ざかってもかまわない、物の質を表す修飾語<sup>4</sup>とされているものである。「多語名詞」というのは、二つ以上の単語から構成される構造で、各構成要素が元々の意味から完全に遠ざかった内容を表すものである<sup>5</sup>。

### ADJ+N名詞句とそれに対応する日本語の比較

以下の分析結果は、チェコ語国立コーパスに基づいて最も頻度多く使われる500語の各形容詞の最も頻度多く使われる名詞句3句（合計1500句）とそれに対応する日本語のコーパスの分析に基づいている。チェコ語のADJ+N名詞句に対応する形態として単語、派生語、複合語、名詞句が認められる。ただし、それぞれのカテゴリーがはっきりとしたものではなく中間的なものも見られる<sup>6</sup>。これらの形態を認知文法<sup>7</sup>の理論に則り、分析する。まずは単語である。認知文法の観点から見ると、心的辞書にそのまま登録されている、音韻的構造と意味的構造からなる記号単位とされる。「大人」のような、分析不可能なものもあれば、「世論」、「近所」、「外国」のようなある程度まで分析可能なものもある。後者は、表意文字を使う言葉の特徴と見なせよう。漢語の両方の構成部分が独

\*カレル大学。博報財団「国際日本研究フェローシップ」招聘研究者。



図2) 単語の構造

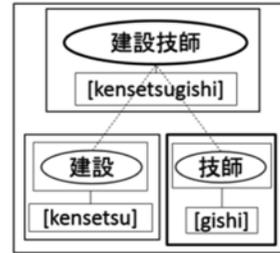


図4) 複合語の構造

立できないものの、話者の意識では区別されているであろう。この意味において実際に分析できない単語と派生語・複合語の間に位置づけるべきと思われる。

派生語は分析が可能な記号単位である。Langacker (2009) によると、接頭辞は新たな意味を表すことがあまりなく、名詞の意味を特定するだけである。大半を占める日本語の派生語は、Langackerの主張通りの振舞いを見せる。「全」、「半」、「両」、「片」、「前」、「後」、「旧」<sup>8</sup>のようなものはもとより、一見したところ複合語の要素に見える、「純利益」から「粗利益」を区別する「粗」のようなものも同様である(田村2014)。ただし、派生語の中には、「大」、「小」、「高」、「新」などのような、どちらかという性質の意味を現す接頭辞を持つものも認められる<sup>9</sup>。重要なのは、両方の場合、派生語の語根に当たるものは自立できるのに対して、接頭辞に当たるものは自立できない。この接頭辞の語根への依存は二つの要素の結合を強くすると思われる。

複合語は分析が完全に可能な記号単位であり、「自己紹介」、「空振り」、「近道」のような心

的辞書に連語として登録されているものもあれば、必要に応じて生産されるものもある。複合語の高い生産性の証拠として、コーパスの調査結果も挙げられる。コーパスにある983語の名詞+名詞の複合語のうち日本語の辞書(多数の辞書を確認済み<sup>10</sup>)に載っているものは41%だけである。重要なのは、一つの単位にはなっていないながら、各部分が独立できるため派生語ほど緊密な結合でないということである。

名詞句は以上の三種類と違って、複数の単語からなる構造である。これは、図5)では、音韻構造と意味構造の単位を表す大きい四角が三つあることが表現している。それぞれの要素の意味と構造そのものが提供するスキーマ的な意味が組み合わせられ、ある捉え方を表す。この点で、日本語の名詞句はチェコ語のADJ+N名詞句と一致している。いうまでもないことであろうが、それぞれの単語は独立でき、他の要素を必然的に必要としないことから結合の強さは派生語ないし複合語より弱いものと見なせられるのは自然であろう。

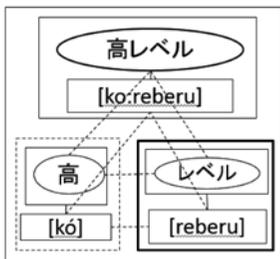


図3) 派生語の構造

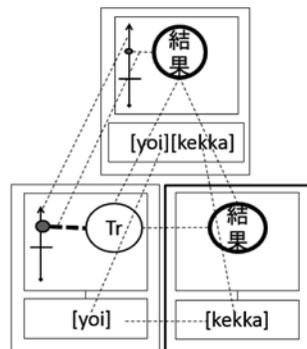


図5) 名詞句の構造

以上をまとめると、日本語では、単語・派生語・複合語・名詞句という四つの形式によって二つの意味要素の意味の緊密性が表現されている。言い換えれば、形式そのものがある程度まで要素間の緊密性を反映している。これは類像性(iconicity)の表れであると考えられる (Pierce 1932, Haiman 1980, Langacker 1991, 2000 etc.)。

チェコ語のADJ+N名詞句とそれに対応する上記の日本語の形式を定量的に比較すると図6)のようになる。チェコ語の緊密連体修飾を含む名詞句の89%は日本語で単語(いわゆる狭い意味の単語、派生語、複合語)に対応し、そのうち64%は日本語では複合語に対応する。同様の構造である名詞句に対応するものは全体のうち12%だけである。それに対してチェコ語の自由連体修飾語を含む名詞句の55%は日本語でも名詞句になり、複合語は24%を占めている<sup>11)</sup>。

### チェコ語のADJ+N名詞句の再定義

前述の比較結果も示唆しているように、チェコ語の連体修飾の種類と、名詞句の構造要素間の結合の種類(あるいは名詞句全体の意味)との間に緊密な関係があると思われる。チェコ語の緊密連

体修飾語の約9割が日本語では一つ概念を表す単語(単語・派生語・複合語)に対応する。言い換えれば、名づけ機能を果たす。Levi (1978)によると、名づけは複合語の中心的な機能に当る。さらに、チェコ語の緊密連体修飾語は、Leviが複合語の特徴として指摘している特性<sup>12)</sup>を示している。それぞれの特性を具体的に見てみよう。ア)程度副詞を受けないこと。日本語の「とても建設技師」と同様、それに対応するチェコ語の「hodně stavební inženýr」も非文法的である。イ)類似構成素の等位接続。言い換えれば、複合語の修飾部分と複合語の全体を修飾する要素を並立させられないということである。例えば、日本語の「親切で建設の技師」と同様、それに対応するチェコ語の「laskavý a stavební inženýr」も非文法的である。ウ)可算性が認めるものもある。要は、複合語の修飾する要素の中には可算性を示すものもあるということである。日本語の「多発損傷」、「一卵性双生児」、「四脚動物」などの複合語の場合も、それに対応するチェコ語の名詞句の場合も(「vicečetná zranění」、「jednovaječná dvojčata」、「čtyřnohé zvíře」)この特徴が認められる。エ)修飾語の名詞化が不可能。複合語の修飾部分の(さらなる)名詞化は不可能であるということ。例えば、複合でない「困難な課題」から「課題の困難さ」という名詞句が作れることに対して、複合語である「業務課題」から「課題の業務さ」のような名詞句が付けられないということである。この点でも、チェコ語の緊密連体修飾は日本語の複合語と同様の振舞いを見せている。

以上をもって、チェコ語の緊密連体修飾の名詞句は複合語と見なすことにする。その結果、同じADJ+N名詞句の形式は、三つの異なる使用を区別することになる一分析不可能な単語のような特徴を示す多語名詞<sup>13)</sup>、複合語、名詞句の三つである。但し、強調すべきことは、三つとも全く同じ形式<sup>14)</sup>を取ることである。異なるのは、Leviの理論に沿って紹介した特徴と、二つの要素の間の距

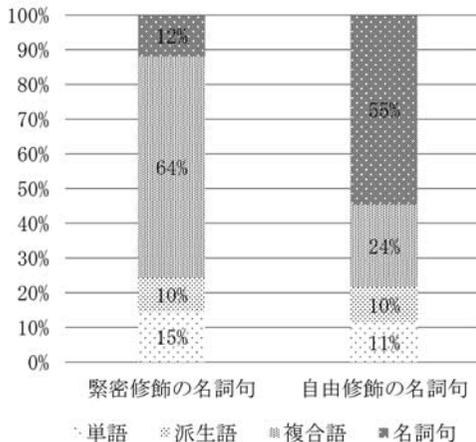


図6) 形式の分布

離の制限のみである。緊密連体修飾は被修飾語のなるべく直前で使わなければならない。つまり、ある概念を二つの単語で名づけているという事実が、距離の制限に反映されている。

この状況を Langacker (1999) の用法基盤モデルの観点から解釈すると、ADJ+N名詞句が慣習的な単位 (conventional unit) の体系を成していると言える。

図7)は図1)と対照的であり、言語をそれぞれの層(音声、音韻、形態、統語、語彙)に区切る構造主義と、形態論・統語論を基本的に区別せずスケールとして見なしている認知文法との根本的な違いもあからさまに示している。

慣習的な単位としてのADJ+N名詞句の基本的な要素は、いわゆる自由連体修飾語+被修飾語の名詞句で、緊密修飾語+被修飾語の名詞句と多語名詞のパターンがその拡張である。形容詞と名詞の関係の緊密性は、二つの要素の非分離性に現れることもあるが、日本語に比べると類像性のレベルが極めて低い(殆どの場合潜在的である)。図8)が示しているように、日本語では、四つの異なる形態の区別が存在し、形態の種類によって、それが名づけ機能を果たすか、修飾機能を果たすかだけでなく、二つの要素の結合の強さもある程度まで分かる。かたや、チェコ語では、二つの要素の関係が異なっても形態が同じである。ということつまり、日本語の方はチェコ語よりも理論

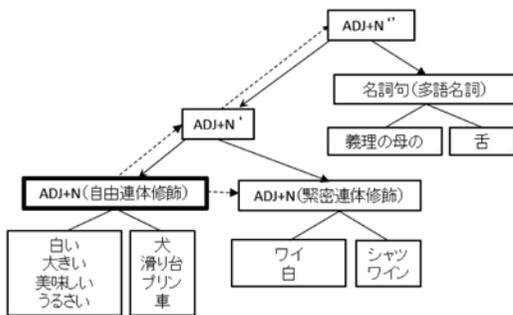


図7) ADJ+N名詞句の慣習的ユニットのネットワーク<sup>15</sup>

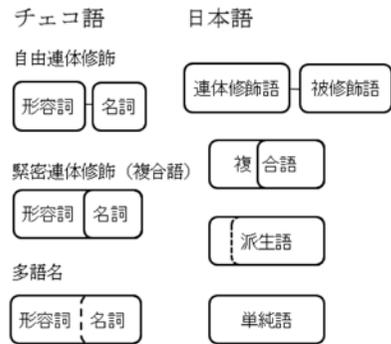


図8 形式の分布

的で合理的であると言える。

チェコ語では三つの用法が同じ形式を共有しているということは、言語の理解へも影響<sup>16</sup>を及ぼす可能性がある。筆者がコーパスを準備した際、緊密連体修飾と自由連体修飾の分類にあたって、場合によっては内省で非常に判断しにくいものもあることと経験していたので、一般話者はこの違いをどう意識しているか簡単なアンケート調査で調べた。回答人数が少なく、予備的結果に過ぎないが、示唆されることが興味深いので紹介することにする。ADJ+N名詞句を50句、「občanský průkaz」[身分証明書]というような典型的な緊密連体修飾の名詞句から「přesolená polévka」[塩辛いスープ]というような典型的な自由連体修飾の名詞句までのスケールに当ててもらった。結果は名詞句によっては大きくばらついているものもある。一つの概念を表す項目<sup>17</sup>でも、回答者がしっかりと内容が意識しなければ、複合語としてではなく、修飾した名詞と解釈する、要は中心的な自由連体修飾名詞句の解釈を取る傾向が強いようである。この傾向は実際に存在するようであれば、チェコ語が複合語から連体修飾までという広い範囲で同じ形式を使っていること(図8)参照)と関係しているのか、どちらかというときつきりと形式を使い分ける日本語(図8)参照)には同じような傾向が認められるのか、という疑問がこれからの課題となる。

## まとめ

上述のように、チェコ語は「ADJ + N 名詞句」という形式を、一つ概念を表すため、また、一つ概念とその特徴を表すために幅広く使っている。アンケート調査の結果も示唆するように、ADJ + N 名詞句の構造そのものが Langacker のいう慣習的なユニットになっており、その意味から明確でない場合、それぞれの使用が話者にとって区別しにくい。表されている概念と馴染みがないならなおさらである。それに対して、日本語は言語手段の形をもって、表している意味の種類を明確にする。

この違いをどうやって日本語教育の現場で扱えばいいのか。母語でも区別しにくいところがあるからこそ、学生の「気づき」に頼れる問題ではないであろう。明示的に説明した上、豊富なインプットを提供することが適切と思われるが、それも確認すべきところとしてこれからの課題に残る。

## 参考文献

- Haiman, J. (1980). The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation. *Language*, 56(3), p.515.
- Haiman, J. (1983). Iconic and Economic Motivation. *Language*, 59(4), p.781.
- Langacker, R. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar I. - Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, R. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar II. - Descriptive Application*, Stanford University Press.
- Langacker, R. (1999). *Grammar and conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008). *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, R. (2009). *Investigations in cognitive grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Levi, J. (1978). *The syntax and semantics of complex nominals*. New York: Academic Press.
- Petr, J. (red.) (1987) *Mluvnice češtiny (3) Skladba*. Praha: Academia.
- Slobin, D. (1996). From "Thought" and "Language" to "Thinking for Speaking". In: J. Gumperz and S. Levinson, ed., *Rethinking Linguistic relativity*, 1st ed.

Cambridge University Press, pp.70-96.

Štícha, F. (2013). *Akademická mluvnice spisovné češtiny*. Praha: Academia.

景山太郎 (1993) 「文法と語形成」 ひつじ書房.

景山太郎 (2013) 「形態論と意味」 くろしお出版.

今井むつみ (2010) 「ことばと思考」 岩波書店.

黒田泰男 (2014) 「和語系接頭辞と漢語系接頭辞」

『広島大学国際センター紀要』(4), 17-28.

チェコ国立共時代表的コーパス SYN2010 : www.korpus.cz

## 注

- 1 例えば、「言語」という名詞である「jazyk」に適切な語尾をつけるだけで「jazykový」「言語の」と言う形容詞が作れる。動詞も同様。
- 2 Petr Jan (1987), Štícha František (2013)等
- 3 例：americký prezident (アメリカ大統領)
- 4 例：silná káva (濃いコーヒー)
- 5 例えば「tchýnin jazyk」、直訳すると「義理母の舌」になるが、実際には「サンセベリア」という多年草の名前である。
- 6 単語と派生語の中間的な存在として「大成功」、派生語と複合語の中立的な存在として「粗利益」、複合語と名詞句の中立的な存在として一つ以上のアクセントのピークのある「典型的特徴」が挙げられる。
- 7 Langacker (1987, 1991, 2008 等)
- 8 「旧」は「古い」と違って、ものの性質を語るのではなく、二つのものの区別の印のような意味を持つと思われる、例「旧体制」「旧字体」。
- 9 このようなものは、多くの場合そのまま一つの単位として、心的辞書に登録されていると思われる。その証拠として、例えば「大成功」の Google in url jp のヒット数/率を挙げられる：  
「大きい成功」 2360 事例 0.3%  
「大成功」 81.1000 事例 99.7%  
「大きい成功」という名詞句が殆ど存在しないことから、「大成功」の定着度の高さが判断できる。
- 10 確認した三種類の辞書の中、一つだけでも複合語を見出しとして扱った場合、「辞書に載っている」という判断である。
- 11 文化によって、複合語化の違いが発生する場合もある。影山 (2013 : 15) 「外界の情報を脳に取り込む際に言語学として重要なのは、外界情報を単純に物理学的な性質としてではなく、あくまで、その言語社会における物の見方、(「語彙フィルター」)を通してということである。」。今井 (2010) も同じ現象を異なる観点からの興味深く解

説している。

- 12 Levi (1978) が六つの特徴を提案しているが、ここでは二つ省略している。省略の理由は、本テーマと直接関係ないので、議論の明瞭さのため省略する。
- 13 多語名詞は単語の特徴を示している理由は、複合語と異なる成立方法にある。多語名詞は、メタファー・メトニミーによるもので、元もとの意味が意識されているものの、もはや「建設技師」などの複合語と同じようにものを表す部分とその種類を表す部分に分けられないからである。
- 14 チェコ語の名詞句の構造は、図5) で掲示している日本語のそれと変わりがないため、新たな図を省略する。
- 15 理解しやすくするために、図7) の具体例は日本語に訳してある。
- 16 Slobin (1996など) が証明したような、使用している言語の文法的な特徴が言語産出の際に話者の考え方に及ぼす影響である。
- 17 日本語では複合語の形を取るもの。